

# 丹波地域 大学・地域連携4 大学合同シンポジウム

大学と地域はどう連携するか ~ 丹波の事例を通して ~

## 報告書

平成22年12月12日(日) 13:30~17:00

J A 丹波ひかみ柏原支店 2階大会議室

主催：大学・地域連携4 大学合同シンポジウム実行委員会

共催：兵庫県丹波県民局

協力：関西大学、関西学院大学、兵庫県立大学、  
神戸大学大学院農学研究科地域連携センター、  
篠山市、丹波市、(株)まちづくり柏原



## はじめに

丹波地域は、神戸から約50km、大阪・京都から約60kmと京阪神大都市圏に近接していますが、少子高齢化や人口減少が進んでおり、大学等が地域にないことなどから若い世代の流出も続いています。

そのような中、関西大学は2006年の日本建築学会近畿支部コンペをきっかけとして丹波市青垣町にスタジオを開設、また、同年、神戸大学農学部は篠山市にフィールドステーションを開設し、それぞれ文部科学省の支援も受けながら、地域と連携した取り組みを展開しています。さらに、県民局の呼びかけに応じて、2009年には関西学院大学が丹波市柏原町に、2010年には兵庫県立大学が同市山南町にそれぞれスタジオを開設し、地域と連携した活動を始めました。

このように、丹波地域では、現在、4つの大学が活動拠点を設置し、各地域の課題を踏まえたテーマのもとに、学生が中心となって元気な地域をつくる取り組みが、地域と連携して展開されています。

このようなことを踏まえて、丹波地域で活動しているこれら4大学とその活動を受け入れ支えている地域の方々が一堂に会し、大学と地域が連携することの意義を考え、交流・連携のさらなる発展の可能性を探ることを目的として、この4大学合同シンポジウムを開催しました。

当日は、募集定員を超える多くの方々にご参加いただき、大変有意義なものになりました。

各大学は、それぞれの活動内容について報告を行い広くその情報を発信するとともに、各大学とその受入地域の方々に「大学と地域はどう連携するか～丹波の事例を通して～」をテーマとするパネルディスカッションで議論を深めました。

各大学の活動のきっかけや内容はそれぞれ異なりますが、大学側の共通の認識として「地域で学ぶことが学生にとって貴重な経験であり、地域の持つ教育力のすばらしさ」等について発言がありました。地域の側からは学生に対して「若者らしい発想、外部からの視点、地域の活動を活発化、田舎と都市をつなぐ役割」といった期待が述べられました。これらのことは、大学と地域の連携は、「地域のニーズと大学のシーズ、大学のニーズと地域のシーズ」が重なるところで実現できているという状況を実感させてくれました。

一方、課題として「学生は毎年入れ替わることや、学生の活動をサポートする大学側の体制」などが上げられました。これに対し、地域の側からは、活性化に向けた地元の動きが報告され、大学の側からは「学生が地域と関わることでその地域のサポーターとしてつながり続ける将来性、学生が持つ情報発信力への期待」、そして「大学と地域はあくまでパートナーであり、継続させるためには一緒に活動することが重要」ということが述べられ、「新しい取組にチャレンジする、大学を改革していく」といった決意表明もありました。

このシンポジウムをきっかけとして、大学と地域の連携活動の意義や課題が広く認識され、連携活動がさらに広がり、大学や学生にとって有益であるとともに、丹波地域がより一層活性化していくことを切に願っています。

最後に、このシンポジウムの開催に当たり多大なご協力をいただいた各大学や地域の関係者、また、当日ご参加いただいた多くの方々に、改めて深く感謝を申し上げます。



## 目次

1 . 開催状況の写真	1
2 . シンポジウムの概要	5
3 . プログラム	7
4 . 出演者プロフィール	8
5 . 開会挨拶	10
6 . 基調講演	11
7 . 活動報告	19
(1) 関西大学佐治スタジオ	19
(2) 関西学院大学柏原スタジオ	25
(3) 兵庫県立大学山南スタジオ	31
(4) 神戸大学篠山フィールドステーション	35
8 . パネルディスカッション	41
9 . 閉会挨拶	51
10 . 参考資料	52
(1) アンケート	52
(2) 実行委員会	59
(3) 活動報告パワーポイント資料	60
(4) 開催チラシ	90
(5) プログラム資料	92

# 1 . 開催状況の写真



## 開会挨拶



実行委員会会長 江川 直樹 関西大学教授



伊藤 聡 兵庫県丹波県民局長

## 基調講演



角野 幸博 関西学院大学教授



活動報告



出町 慎 関西大学研究員



北出 悟士 関西学院大学大学院生



山崎 義人 兵庫県立大学講師



近藤 史 神戸大学地域連携研究員



パネルディスカッション







閉会挨拶



実行委員会副会長 田原 直樹 兵庫県立大学教授

## 2 . シンポジウムの概要

このシンポジウムは、丹波地域の各地で行われている大学と地域が連携した各種の取り組みを紹介するとともに、大学が地域と連携して地域にどのような役割を果たせるかなどについて議論し、互いの連携事業をより一層発展させ、パートナーシップをより強固なものにしていく契機とする目的で開催された。参加者は、地域住民、学生、大学関係者、行政関係者等の約120名であった。

### 《基調講演》

今回は、地方都市再生などを専門に研究されており、関西学院大学柏原スタジオで学生のフィールドワーク活動もご指導いただいている、関西学院大学総合政策学部・角野幸博教授に基調講演をお願いした。

### （要旨）

近年増加している大学と地域の連携の背景には、大学、地域それぞれの事情（ニーズ）がある。

大学には多数の教員や研究員が在籍するほか、学生、他地域・他大学とのネットワークといったシーズ（種）を持っている。地域には、自然、歴史、産業などの地域資源、経験豊かな人材、まちづくりへの熱意などがシーズであると大学は考える。

重要なのはこれらをどのようにマッチングするか。従来より、シーズとニーズを組み合わせてきたが、今後は大学と地域のシーズ同士、ニーズ同士を組み合わせることで生まれる可能性を考えていくことが重要である。

ただし、連携活動を行ううえでは、いくつかの条件がある。最も重要なのが、「連携しつつ自立する」ということである。互いに依存するのではなく、刺激しあい、成果を急がず進んでいける関係づくりをしていかなければならない。

### 《活動報告1・関西大学 TAFS 佐治スタジオ「農山村集落との交流型定住による故郷づくり」》

関西大学 TAFS 佐治スタジオ・出町慎研究員に報告していただいた。

### （要旨）

関西大学は、平成18年の日本建築学会コンペがきっかけで、丹波市青垣町佐治で活動を始めることとなった。

まず、関わり続ける環境づくりとして、空き家リノベーションを行い、佐治スタジオを含め2件の空き家リノベーションを行った。拠点を設けたことで「地域再生」滞在型ワークキャンプやイベントなど様々な活動が展開されている。

また、平成22年は氷上町成松の愛宕祭りの「造り物」づくりに学生が参加した。

現在は空き家活用の仕組み「佐治倶楽部」を計画中で、常に町に人が暮らす景観をつくる取り組みを進めている。

これからは、空き家の活用や景観を考える仕組みづくりが重要であり、本日参加している4大学との連携に可能性を感じている。

### 《活動報告2・関西学院大学柏原スタジオ「地域で学ぶ・地域と学ぶまちづくり」》

関西学院大学大学院修士課程1年・北出悟士さんに報告していただいた。

### （要旨）

丹波市の中心市街地活性化計画に基づく事業を支援するため、平成21年4月から授業「都市政策演習」の一環でフィールドワークが始まった。

4月にまち歩きを行い、まちの課題を抽出することから活動を始め、まちなみ模型作製、ワークショップ、地域イベントへの参加及び「KGカフェ」の開催、学内の「リサーチフェア」での発表など、学内外で様々な活動を実施した。

今年度は、まち歩き、カフェや織田まつりへの参加、ワークショップなど、趣向を変えながら継続して実施している。

これまでの活動で特に反省すべき点は引継ぎについて。今後は、季節ごとにカフェを開催する計画や、長期休暇中の関学柏原スタジオの利用促進などの計画が進行中であり、学生達と実現に向けて議論していく。

### 《活動報告3・兵庫県立大学山南スタジオ「丹波地域の魅力の発見と、学習・交流、情報発信」》

兵庫県立大学自然・環境科学研究所・山崎義人講師に報告していただいた。

#### （要旨）

山南スタジオは丹波市・県民局・(財)丹波の森協会の支援のもと、兵庫県立大学が「学習と交流の拠点」として開設した。丹波地域の特色ある資源を活かしたまちづくりを支援するため、学生の活動拠点として、研究や社会貢献の拠点として、活用していく。

大学では「化石と地域づくりフィールドワーク」という授業を開講しており、今後は学生が地域の方に提案をしてもらう予定である。

課題は、使用頻度が低いこと、地元の方々との交流がなかなか展開していかないこと。活動する主体となる人が上手く関わるような仕組みを作らなければならない。

### 《活動報告4・神戸大学篠山フィールドステーション「野良仕事を学ぼう、田舎に学ぼう/地域の活性化につながる提案づくりに挑戦」》

神戸大学大学院農学研究科・近藤史研究員に報告していただいた。

#### （要旨）

神戸大学農学部では篠山市をフィールドに、「食農コープ教育プログラム」を実施している。

この活動拠点が「神戸大学篠山フィールドステーション」であり、2名の研究員が駐在し、演習のコーディネートや地域の方とのミーティング、地域活動の相談などを行っている。

フィールド演習では、篠山市で地元の農家を講師とし、農作物の栽培や様々な村仕事を学ぶ。

農業農村プロジェクト演習では、食と農の現場で合宿をして農村地域の活性化に繋がるアクションプランを考える。

課題は、学生が継続的に地域と関わるサポート体制が整っていないこと、そしてあまり学生にフィールドステーションが活用されていないこと。今後はこれらの課題のフォローに、フィールドステーションとして力を入れていきたい。

### 《パネルディスカッション「大学と地域はどう連携するか」》

大学関係者と、それぞれの地域を代表する住民をパネリストに迎え、パネルディスカッションを行った。

#### （要旨）

前半は大学側から“現場教育の重要性”に関して、地域側からは“関わり方”に関して発言があった。

客野准教授は地域というフィールドを「学生が主体的にアプローチする方法を学べる場」と表現し、その重要性を改めて提示した。一方山南地域代表・村上氏は「協学」という言葉を唱え、「学生には子供達やお年寄りの『協学』の橋渡しを担って欲しい」と大きな期待を寄せた。

会場からは「田舎で安定したインカム(収入)が得られないことについてどう考えるか」、「実施者が誰になるのか見えない」といった、シビアな意見が寄せられた。

後半は会場の発言を踏まえ、内平研究員が「こうした活動によって、我々が大学でキャリアを得ることはできない」と大学の仕組みの現状を明かした。また、田原教授が「我々が出来るのは仕組みづくり。場づくり、仕組みづくり、きっかけづくりということで、成果が現れるには時間を要するがご理解いただきたい」と述べた。

最後は角野教授が連携活動の可能性を整理したうえで「あくまでパートナー関係、一緒に何かを考える、あるいは一緒に活動することで進んでいくのではないかと総括した。

### 3. プログラム

第1部		13:30~15:10	
13:30	10分	開会 開会挨拶	大学・地域連携4大学合同シンポジウム実行委員会会長 江川 直樹 兵庫県丹波県民局長 伊藤 聡
13:40	30分	基調講演 「大学のシーズを地域のニーズに」	関西学院大学総合政策学部 教授 角野 幸博
14:10	60分	活動発表 関西大学 TAFS 佐治スタジオ 「農山村集落との交流型定住による故郷づくり」	関西大学 TAFS 佐治スタジオ 研究員 出町 慎
		関西学院大学柏原スタジオ 「地域で学ぶ・地域と学ぶまちづくり」	関西学院大学大学院 修士課程 北出 悟士
		兵庫県立大学山南スタジオ 「丹波地域の魅力の発見と、学習・交流、情報発信」	兵庫県立大学自然・環境科学研究所 講師 山崎 義人
		神戸大学篠山フィールドステーション 「野良仕事を学ぼう、田舎に学ぼう / 地域の活性化につながる提案づくりに挑戦」	神戸大学農学研究科 地域連携研究員 近藤 史
休憩			
第2部		15:20~17:00	
15:20	90分	パネルディスカッション コーディネーター	関西学院大学総合政策学部 教授 角野 幸博
		パネリスト	関西大学環境都市工学部 教授 江川 直樹 関西学院大学総合政策学部 准教授 客野 尚志 兵庫県立大学自然・環境研究所 教授 田原 直樹 神戸大学大学院農学研究科 地域連携研究員 内平 隆之 イクジウッド株式会社 代表取締役 足立 成人 株式会社まちづくり柏原 代表取締役 荻野 吉彦 上久下恐竜の里づくり協議会 事務局長 村上 茂 福住地区まちづくり協議会 事務局員 土井 英樹
16:50	10分	閉会 閉会挨拶	大学・地域連携4大学合同シンポジウム実行委員会副会長 田原 直樹

## 4 . 出演者プロフィール

### 基調講演・コーディネーター

かどの ゆきひろ  
角野 幸博 氏 関西学院大学総合政策学部 教授

1955年京都府生まれ。京都大学工学部建築学科卒業。大阪大学大学院博士後期課程修了。(株)電通、武庫川女子大学教授等を経て、2006年4月より現職。関西学院大学社会連携センターコーディネーター。工学博士。一級建築士。著書に『郊外の20世紀』(単著：学芸出版社)、『都心・まちなか・郊外の共生』(晃洋書房、共編)、『都市のリデザイン』(共著：学芸出版社)他。地方都市再生やニュータウン再生等の調査研究、計画立案などに携わる。

### パネリスト

えがわ なおき  
江川 直樹 氏

関西大学環境都市工学部 教授

早稲田大学理工学部建築学科卒業、同大学院修士課程修了。1977年(株)現代計画研究所入社、83年同大阪事務所を開設し、集住環境を中心とする建築設計と都市デザインに取り組む。

奈良市建築文化賞、日本建築士会連合会賞(作品賞)、兵庫県人間サイズのまちづくり賞、日本都市計画学会賞(計画設計賞)、都市住宅学会賞(業績賞)、地域住宅計画賞、日本都市計画学会関西まちづくり賞、土木学会デザイン賞、日本建築家協会優秀建築選、他受賞多数

きゃくの たかし  
客野 尚志 氏

関西学院大学総合政策学部 准教授

専門分野：都市環境、都市解析、多自然居住地域のまちづくり

大阪大学大学院工学研究科博士後期課程修了後、兵庫県立人と自然の博物館に研究員として勤務。生涯学習に関する実務と都市環境や多自然居住地域のまちづくりなどの研究に従事。2009年より現職となり、現在はGISや都市環境、建築環境などに関する授業を担当している。大阪大学大学院在学中には、財団法人兵庫丹波の森協会に専門研究員として在籍。

あだち なりと  
足立 成人 氏

イクジウッド株式会社 代表取締役

建設会社勤務後、27歳のとき家業の製材所を継ぎ現在に至る。故郷で仕事が出来ることに感謝し、地域活性化のため、商工会、まちづくり協議会などで、関西大学の学生たちの協力も得ながら日夜奮闘中。また毎年夏に行われる、関西大学の交流滞在型ワークキャンプでは、就業体験先として学生たちを受け入れ、共に作業で汗をかき、地域の木材をとおして語りあえることを楽しみにしている。現在、イクジウッド株式会社代表取締役、一級建築士。

おぎの よしひこ  
荻野 吉彦 氏

株式会社まちづくり柏原 代表取締役

昭和45年3月関西学院大学商学部卒業後、同年4月に家業である株式会社荻野興作商店に入社し、酒類販売店を営む。地元の商工会、商店街連合会などの役員を歴任し平成12年、株式会社まちづくり柏原設立時より取締役に就任、平成17年より代表取締役。

丹波市中心市街地のまちづくりの中心人物として活躍し、後進の指導も行う。長年のまちづくりの経験を活かし全国各地での講演活動も行っている。

たはら なおき  
田原 直樹 氏

兵庫県立大学自然・環境科学研究所 教授

兵庫県立大学自然・環境科学研究所の教員と同時に、兵庫県立人と自然の博物館の研究員を務める。専門は都市計画。研究所では環境計画研究部門、博物館ではコミュニティデザイン研究グループに所属、都市や多自然居住地域のプロジェクトにかかわってきた。平成22年度後期から兵庫県立大学山南スタジオを拠点とするフィールド・ワーク「化石と地域づくり」を担当。

うちひら たかゆき  
内平 隆之 氏

神戸大学大学院農学研究科 地域連携研究員

1974年山口県生まれ。神戸大学大学院自然科学研究科博士課程修了。博士(工学)。2008年より神戸大学大学院農学研究科地域連携センターに現職として勤務。持続可能な地域の実現に向けた住民行動を支える環境デザインを専門に研究を行う。具体的には都市部ではエコセンター、農村部では大学の地域連携活動を研究。更に阪神間で農村地域のシェアアンテナショップの自力建設支援や都市農村交流マーケットの環境づくりなどを実践中。

## 活動報告者

でまち まこと  
出町 慎 氏

関西大学 TAFS 佐治スタジオ 研究員  
/ 佐治倶楽部 副部長

1982年、奈良市出身。関西大学工学部建築学科卒業。研究分野である、建築環境デザインの視点から、丹波市における地域再生に関わり続けている。

やまさき よしと  
山崎 義人 氏

兵庫県立大学自然・環境科学研究所 講師

1972年、神奈川県生まれ。早稲田大学にて後藤春彦氏に師事し、まちづくり・地域再生を学ぶ。博士(工学)。神戸大学大学院COE研究員を経て、2008年4月より現職。著書に「まちづくり批評」「住民主体の都市計画」等。

むらかみ しげる  
村上 茂 氏

上久下恐竜の里づくり協議会 事務局長

2005年丹波市山南町にUターン。2006年8月山南町上滝篠山川河岸で国内最大級の草食恐竜化石の肋骨を発見。現在上久下地域づくりセンター活動推進員として地域自治行政の職務のかたわら、まちづくり活動に従事。年1回(冬季)の発掘調査に参加しながら講演や発見現場案内、発掘現場の小石から化石を発見する体験指導など行う。上久下地域づくりセンター長、人と自然の博物館地域研究員。

どい ひでき  
土井 英樹 氏

福住地区まちづくり協議会 事務局長

2008年、神戸大学農学部との協力を得て、地域のホームページ「福住さとねっと」を開設。その際出会った地域内外の若手グループにより2030年に福住の人口増倍を目指す「ふくすみ2030プロジェクト」を設立。以降、まちづくりの研究・実践に取り組む。本年、縁のあった神戸大学の農業農村フィールド演習を地域に受け入れ、学生の地域イベント参加を企画。大学と地域の連携によるまちづくりを模索中。

きたで さとし  
北出 悟士 氏

関西学院大学大学院総合政策研究科  
修士課程1年

1986年、和歌山市出身。昨年度から都市政策演習として丹波市柏原町のまちづくりに参加。バリアフリーとまちなみ保存の観点から研究をし、柏原の活性化に奮闘している。

こんどう ふみ  
近藤 史 氏

神戸大学大学院農学研究科 地域連携研究員

1977年、鳥取県生まれ。京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究科博士課程修了。2008年12月から現職。神戸大学農学部篠山フィールドステーションに駐在し、篠山市において演習のコーディネーターや地域連携に関する相談窓口など、大学と地域をつなぐ橋渡しをしている。

## 5 . 開会挨拶

大学・地域連携4大学合同シンポジウム実行委員会会長 江川 直樹

皆様こんにちは。開会にあたりまして一言ご挨拶をさせていただきます。

私事になりますが、2006年6月、日本建築学会の創立120周年を記念した支部事業「美しくまちをつくる、むらをつくる」という設計提案競技が行われました。そこに私たちの大学が応募したというのが、私たちの大学と、丹波地域とのおつきあいが始まったきっかけです。

その後、実際に取り組みをはじめると、幸いにも文部科学省から色々なご支援をいただくことになりました。当時、文部科学省のヒアリングを受ける中で、担当官と「日本の様々な地域のことを考えると、大学がもう少し地域と連携して色んなことをやるべきではないのか」と話したことがありました。それから4年半経ちましたが、その頃私が思い描いていたものの延長として、丹波で4つの大学が連携をはじめているということで、非常に感慨深いものがございます。

本日は4大学が一堂に会し、大学と地域の交流連携のさらなる発展を図るべく、あるいは可能性を探るべく、シンポジウムを開催する次第です。

このシンポジウムが、大学と地域の連携にとって非常に有意義なものになることを期待し、開会のご挨拶とさせていただきます。

兵庫県丹波県民局長 伊藤 聡

本日は4大学合同シンポジウムを開催するにあたり、このように大変たくさんの方々にお越し下さいまして、ありがとうございます。私も今日は非常に楽しみにしてまいりましたので、最後まで話をお聞きしたいと思っております。

この4月に丹波県民局長を拝命いたしました。ご存知のとおり、丹波地域に大学はありません。地元の高校生は、地域外の大学に通うか、あるいは地元を離れて下宿するかしなければならないということになります。町中を歩くと高校生はたくさんいて、会うと挨拶してくれたりするのですが、大学に通うような年代の方とお会いする機会はなかなかありません。

柏原には関学のスタジオがあります。大学の活動拠点が丹波地域にあるというのを、初めて知りました。また、8月には県立大学が谷川駅前でスタジオをオープンしました。こうした活動拠点のある地域は珍しいのではないかと、大変嬉しく思っております。

丹波地域には地域の資源がたくさんあります。また、大学の活動拠点をあたたかく迎える地域の人々の雰囲気すごくいいと思います。それぞれの地域でまだそれほど活動実績があるわけではありませんから、これから歴史を刻みながら連携してお互い良い関係になるのを心から願っております。そういう意味で、今日のシンポジウムは大学生の方にも地域の方々にもたくさん来ていただいておりますので、相互の今後のあり方を考えていただく半日になればと願っております。

最後になりましたが、シンポジウム開催にあたり、打合せなどご協力頂いた方々、本日講演あるいはシンポジウムのパネラーとしてご参加くださる方々に心から御礼申し上げて、開会のご挨拶といたします。

## 6 . 基調講演

### 「大学のシーズを地域のニーズに」

関西学院大学総合政策学部 教授 角野 幸博

ご紹介いただきました角野でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

タイトル・テーマですが、ご紹介いただいたように、「大学のシーズを地域のニーズに」というようにご用意したのですが、実は、本当はその反対のつもりなんです。ということは、「地域のシーズを大学のニーズに」という裏側も同時に考えなければいけないと思っております、お手元のレジュメでは、長くなりましたが両方書かせていただいております。（参照：レジュメ...12 頁）

#### なぜ今「地域連携か」 大学の裏事情

最近、全国的に様々な大学が地域の中に入り、いろいろな活動をさせていただくという事例が増えてきております。それが一体なぜなんだろうかということですが、これはここだけの話、大学の裏事情を少し申し上げなければいけないかなというところもあります。

レジュメにも少し書いていますが、各地の大学はいろいろな課題を突き付けられています。いわゆる18歳人口が減少していく中で、あるいは国際的な競争力が落ちつつある中で、どうしていくのかということを実際に考えているわけです。

我々大学人には、常に「教育か研究か」という選択肢があり、どうしても研究中心になりがちですが、それに対して、教育サービスができていないのではないか、教育もしっかりやってくださいよと、「教育と研究」の二本柱というものがずっと言われてきました。ところが近年になって、その二本だけでは足りない、もう一本あると、「教育・研究・社会貢献」という三本柱のミッションが出てまいりました。

また、研究・教育自身が学際化し、境界領域がどんどん外れてきています。学部の名前を思い浮かべても、何をしている学部なのかよく分からないという学部が全国的に増えてきました。それは、学問・研究領域が複合化したものを対象とすることが増えてきているということにもなるわけです。

例えば、フィールド・地域に入っていくということは、昔ですと、考古学で調査をする、あるいは民俗学で地元の方の話を伺う、社会学という分野で実際の地域の人々の動きを観察するというような形で、ある特定の分野のみが地域と非常に深い関係を持ってきておりました。別の分野においては研究室の中でやればいい、あるいは文献をきっちり読み解いていくことが重要であると考えられてきたのですが、どうやら、それでは次の時代の研究領域を切り開いていくことが難しくなっている。学際的な研究領域の拡大ということからも、いろいろなところが「地域」というものを理解しなければならぬ、入っていかなければならないという事情があります。

また、教育の仕方にしてもフィールドワーク、つまり現場に入っているいろいろな考えなさいという現場主義教育が強く求められるようになりました。そういう事情を踏まえながら、18歳人口が減っていく中で、大学がどのようにして生き残っていくか、学問・教育・学生の質を維持し続けていくことができるかという、大きな生き残り戦略上の課題もあり、地域を見る目が広がったという状況がございます。



大学のシーズを地域のニーズに・地域のシーズを大学のニーズに

関西学院大学総合政策学部 角野幸博

1. 連携が求められる背景（ニーズ）

大学の事情 ・ミッション（使命）の変化 ・研究・教育の学際化 ・現場主義教育の必要性 ・生き残り戦略
--

地域の事情 ・人口減少と高齢化による人材不足 ・専門的知識、技術、情報不足 ・地域経済の衰退 ・生き残り戦略
--

2. 大学のシーズ

- ・専門的知識と技術と情報
- ・学生のエネルギーと感性と時間
- ・他地域、他大学等とのネットワーク
- ・触媒としての学生

3. 地域のシーズ

- ・ゆたかな地域資源：自然環境、歴史、文化、産業
- ・未活用の地域資源、遊休化する地域資源
- ・経験豊かな人材
- ・まちづくりへの熱意

4. いくつかの事例とマッチングの視点

	大学のニーズ	大学のシーズ
地域のニーズ	共同パートナー開発 新しいニーズ発見	最適解の組合せ
地域のシーズ	最適解の組合せ	シーズの深化 共同ニーズ開発

5. 連携活動活性化の必要条件

- ・ベースキャンプと移動手段、情報インフラ
- ・コーディネーター
- ・地元の方々のご理解

6. 持続可能な連携のために

- ・「学生」という存在の理解
- ・「地域」という存在の理解
- ・毎年の目標確認（ただし成果を急がない）
- ・連携しつつ自立すること

## 地域にとって“使える”大学の存在

それに対応するように地域側の事情があります。レジュメにも何点か記載していますが、地域の側の事情については、大学が想像していること以外のことがたくさんあると思います。表向きには先ほど市長の御挨拶の中でも伺いましたように、人口減少・少子高齢化に直面し、地域の元気がない、これから先の見通しがつかない、あるいは専門的な知識や技術や情報が不足しがちになるという事情ですが、そういう時に、その地域が次の時代にしっかり元気に生き残っていくために、様々な政策課題を突き付けられていく中で“ひょっとしたら大学を上手に使うことができるかもしれない”という思惑があっても決して不思議ではありません。大学、地域それぞれ思惑がある中で、様々な活動が各地で起こっているのかなという気がするわけであります。

そうであれば、なおかつ大学はどういう武器を持っていて、どのようなシーズがあって、それを地域の中でどのように受け入れていただけるのか、どのように展開していくのかを、真剣に考えなければいけません。また、地域の側も、地域の特徴 大学の教員や研究者や学生たちがこの地域に魅力ややりがいを感じてそこに入って来るためには、一体この地域の特徴は何であるのかということ、地域の方々自身が分析・理解していただく必要が出てきます。

## 大学のシーズ

私なりに考えてみますと、おそらく地域から期待されている大学のシーズとは、一つには専門的な知識・技術・海外を含めた情報が大学にはあるのかなと思われているわけです。

ただ、こういった知識・技術・情報は当然のことながら連携・活動に関わる大学側の一体誰が、あるいはどういうセクションがどういう形で関わるのかによって大きく変わってきます。

従来から、大学のスタッフは個人的には調査対象として、また地元自治体からの依頼のもとで研究させていただいたり、委員会や審議会の委員として入っている部分があります。しかし、それが大学の研究者個人が入る場合、授業の一環として入る場合、あるいは大学の研究室の調査研究として入る場合、当然持ち出せるシーズは変わってまいります。

また、なかなかご期待に添えないということもあります。だから、専門的知識・技術・情報と言いながら、連携の仕方によって大きく変わってくるということをご理解いただいておかないといけないと思っております。

とりわけ期待されているのは、学生そのものです。学生のエネルギー・感性・時間というものが貴重な資源として見られているのではないかと。それはそのとおりだと思うところもございます。

三点目は、その特定の大学・学部のシーズではなく、その大学や学生の活動を通じて他の地域・大学の活動と繋がっていく可能性が極めて高いことです。あるいは一つの大学の中でも、ある学部がお付き合いさせていただく中で、さらにそこから他の学部へも広がっていくというような、ネットワークを更に広げていくための可能性を大学はかなり持っているのかなという気がしております。

そして、何よりも私自身が重視したいのは、「触媒としての学生」です。また後ほど少しお話しますが、よく言われるように、“学生さんが来てくれて何かをしてくれたら非常に地域が元気になる”“大学の教員がやって来ているんな話をしてくれる、あるいは活動してくれることは地域にとっては非常にありがたい”と言われるのですが、単にそういう受身の話だけでは、逆に言うと、学生が来なくなったらそれでおしまいなのか？ということになるわけですね。

本来は、学生や大学の人間が地域に入ることによって何らかの刺激を地域の方に受けていただき、そして学生がいなくなった後も、その活動や地域の思い入れといったものが活性化して動き続けていく。本来はそれが一番重要なのではないかと考えています。

ちょっと前半が長くなってしまっていますが、大学のシーズというのはそんなところがあるんじゃないかなと思います。

## (大学が考える)地域のシーズ

また、我々が考えておりますという、カッコ付きですけど、地域側のシーズは 地域に対する期待と言ってもいいかもしれませんが、まず、そこには非常に豊かな様々な資源があるということです。つまり、自然環境や歴史的・文化的な様々なストック、あるいは現在の活動であったりです。

また、地場産業や先端的な新たに導入される産業といった様々な活動といったものが地域にはあります。それを直接学ばせていただける、学生たちに触れさせることができるんじゃないかというような期待があります。

また、地域の方々自身が気付いてられないかもしれないという未活用の地域資源・埋もれた地域資源、あるいは元々活躍・活動されていたが人口減少や高齢化の中で、それに携わる人がいなくなった、いなくなりつつあるという遊休化していくものに対して、ひょっとしたら大学側が使わせていただける部分があるかもしれません。

さらに直接学生に触れさせたいのは、地域で実際に活動・生活されている経験の豊かな住民の方々であります。そういった経験豊かな地域の方々には直接いろんなことを教えていただけるということ、もっと言うならば、それはその地域の生活そのものですね。生活の仕組みそのもの、生業や住民の活動など全部を含めた生活そのものの中に、学生を取り込んでいって、そこで様々な刺激を受けるということが、大学が地域に対して期待しているシーズになるわけであります。

## 「大学」「地域」、関わり方は実は様々

そういった大学・地域のシーズ、大学・地域のニーズをどうにかたちでマッチングすることができるのかというのが一番大きなテーマ・問題になるわけです。先ほど少し申し上げたのですが、要するに、大学といってもいろいろある、地域といってもいろいろあるというように、一言で大学とはこうである、地域とはこうであると、とてもじゃないですが割り切ることはできません。

たとえば、大学のどういう主体がどういう仕組みのもとで地域に関わるかといったときにも、今までは教員が個人で研究活動の一環として、あるいは地域の側から依頼をされて、研究活動の一環として地域に入ることがありましたが、今ではそれが少しずつ広がって行って、ゼミ活動として、あるいは学部の教育、ちゃんとカリキュラム化された、単位をそこで発行されるという学部の教育として入っていく場合もあります。また、教員は直接関係なく、サークル・クラブ・ボランティア活動という形で入っていく場合などいろいろあります。いろいろあるんだけど、受け止める側は一言で「大学が入って来て来ている・協力してくれている」と思われます。ですが、実はいろいろな段階があるということを理解しておいていただかなければなりません。

一方で、地域と言ったときにもそれは府県レベルでの対応なのか、県民局なのか市町村なのか、あるいはたとえば、商店街などの組織なのか、農協などの特定の団体なのか、それによっても当然、関わり方は変わってきます。

だから我々は、非常に多様な組み合わせの可能性の中からどういう課題ならどういう組み合わせが最も適切なのかを考えなければならず、現在そのような模索をしている最中だと思うのです。

今回、後ほど各大学から紹介がありますが、かたち・関わり方全てが違います。

だから、今日4つの、様々な関わり方をご紹介していただくことで、私も楽しみにしているのですが、どれが良いのか悪いのかではなく、こういうテーマの場合はこういう関わり方を考えましょうということと一緒に考えてみたいと思っております。

## 関西学院大学と地域の関わり方の事例

関西学院大学の例をとって、他の地域で関西学院大学がどんな形でどんなところで関わっているかということを紹介いたしますと、関西学院大学には「研究推進社会連携機構」という長ったらしい名前の組織があり、その中に「地域連携センター」というものがあって、そのセンターのコーディネーターという仕事を私が拝命しています。

コーディネーターというのは、言うなれば臓器移植のコーディネーターみたいなものですね。ここでこういうものがあり、これを最も必要としているのはこちらだからここに組み合わせましょうというようなコーディネーター役です。

たとえば、いくつか紹介しますと、関学の本部キャンパスは西宮にございますので、地元の西宮市とある学部と一緒に「西宮検定」という検定の手伝いをしたり、宝塚では国の予算が獲得できたということもあって、「宝塚ワールドワーク」という、全学部の学生が参画でき、そして単位にもなるというプログラムを何年間も続けて参りました。

また、伊丹市では地元の高校生に対する情報教育ですね。コンピューター教育のお手伝いをする。それを通して、地域商店街などの活性化をお手伝いをするというプログラムもありました。これらはいずれも単位になる、授業の一環です。それに対して、福井県敦賀市との関わりというのもあります。

数年前に、関学のワンダーフォーゲル部の学生が福井県で遭難しました。そのときに、福井県の方に大変お世話になったことがあり、それ以来、福井県と関西学院大学との間で「包括連携協定」が結ばれ、その一環で勝山市とこういうことをする、敦賀市とこういうことをするといったことをしています。それは単位にはなりません。ケースバイケースで学生が現地に入り込んでいくといった形です。

また、そういう背景があったものですから、大学側の教職員と福井県側の職員の方々との交流イベントなんかもあって、つい最近では野球大会とかやっていましたし、あるいは大学の食堂で福井県特産のメニューを出すというようなことも行っています。

だから交流ひとつとってもですね、本当にいろいろなんです。

あと、たとえば佐用町には例の災害復旧のボランティアに入り込んでいたり、総合政策学部のある三田市では、駅前の市のある施設にまちづくりに関連する様々な情報提供をしたり、市民の方に活動してもらっている拠点の管理のお手伝いをしたりしています。今はなくなったのですが、三田市のある中心商店街でラボを作って、そこを拠点に活動させていただったり、私の大学一つをとっても、いろんなところでいろんな関わり方があるということです。

ということは、逆に地域の側からすると、一つのまちをとってみてもいろいろな大学とのいろんな関わり方ができるはずということになるのかなということでもあります。

## ニーズ×ニーズ・シーズ×シーズ

レジュメの4番目のところに表がありますよね。横に大学のニーズ・大学のシーズ、縦に地域のニーズ・地域のシーズという非常にシンプルな表を作ってみました。

たとえば、今日の講演のタイトルであります「大学のシーズと地域のニーズ」あるいは「地域のシーズと大学のニーズ」、これはちゃんとした場所で普通に組み合わせられるはずですよ。あるいは組み合わせることを検討すべきです。ですから、この表の中では「最適外の組み合わせ」という欄が二つあります。これはシーズとニーズをどう組み合わせればいいのかということです。私はこれから重要になるのは、その残っている二つの箱ではないかなと思います。

つまり、大学のニーズと地域のニーズを組み合わせるといったことはどういうことか、あるいは大学のシーズと地域のシーズを組み合わせることができないのではないかなということなのです。

つまり、両方のニーズを組み合わせるといったことは、共同で、お互いパートナーとなって同じ方を向いて何か出来るという部分ではないか。あるいは、そのニーズの組み合わせの中からさらに踏み込んで、こういうことを次にできるかもしれない、あるいはやりたいよねという新しいニーズを育てることが出来るかもしれない。

また、シーズとシーズの組み合わせでは、大学側のシーズだけ、地域のシーズだけでは今一つだけれども、それを組み合わせることによって非常に面白い地域資源・地域の理想図として外に発信していけるものが見つかるかもしれないというような部分。つまりニーズとニーズの組み合わせ、シーズとシーズの組み合わせということまで含めて次の時代・ステップを考えてみる価値があるのではないかなというように思います。

## 活動継続のための条件

さて、ここまではわりと抽象的と言いますか、理想的・原論的な話をしたわけですが、当然我々も現場に関わらせていただく中で、やはりいろんな課題に直面して参ります。

こういった連携活動を本当に活性化して継続していくためには、いろいろな条件が要るなということを日々実感し、痛切に感じております。

ここでは三つくらい、誰でも思い浮かべられることを書いておりますが、やはりベースキャンプ、活動拠点です。それぞれの地域の中に活動拠点、しかも自由に使える拠点がなくなかなか辛いなということを前々から思っておりまして、そういう機会を我々は今回、昨年から頂戴したわけですね。

「柏原スタジオ」という拠点を頂戴しております。その使い方については、まだまだ我々自身工夫しなければいけないことがあります。拠点があるということは非常にありがたい。そこを拠点にして、いろんなところにさらに入り込んでいくことができる。

総合政策学部は三田市ですから比較的近いわけですが、どうしても移動手段が必要になります。とりわけ学生諸君というのはお金がありません。教員もありませんけども、学生諸君はもっとありません。交通費をどうするかということには日々頭を抱えているところです。

それから情報網インフラと言うか、地域に入り込みながら、その地域情報と外の情報とをちゃんとリアルタイムに両方組み合わせながらいろいろなことをしなければいけない。要するに、地域の方々の事情・話・声をちゃんと聞ける、それにアクセスできるような仕組みがやはり必要です。スタジオに来て結局何も分からないというケースもあります。当然学生が自分たちで努力するのが当たり前ですが、その上でどうすればその地域のより深い情報・事情にアクセスできるのかということ、非常に気にしているところです。

そして、ここではあえて書いておりませんが、先立つものが必要かなと思います。

それからコーディネーターです。これは地域側のコーディネーター、大学側のコーディネーターという、もちろん大学生が商店街に一軒一軒入っていく、農家に入っていくということでもいいのですが、やはりそこはちゃんとコーディネートしていただけるような仕組みがあると、より深く効率的に入っていくことができるのではないかと考えております。

そして、言うまでもなく地元の方々のご理解。

あとは書いていませんがリスク対応です。何か事故が起こったときの問題です。これについては、こちらはまだ恐る恐るやっているというのが大学側として正直なところです。もし学生が地元で何か引き起こしてしまったら、あるいは事故に遭ったらどういうかたちで責任を取ることになるのか、そのあたりがまだしっかりできていない、詰められていないということも正直ございます。

そんなかたちで必要条件、これは現場で私が思っているところですし、また後ほどパネルディスカッションの中で各大学・地域の方からお伺いしたいと思います。

## 持続可能な連携のために

そして最後になりますが、「持続可能な連携のために」ということで、まず学生の側からいきますと、学生は必ず卒業します。どんなのんびりした学生でも8年ぐらいたら卒業します。あるいは、いずれにしてもいなくなるケースが極めて高いです。卒業するのか中退するのか知りませんが。

せっかく地域と仲良くなってコミュニケーションができたとしても卒業します。そして、困ったことにまた新しい学生が入ってきます。また一からスタートです。そういうことを地域の方々には辛抱強く見守っていただきたいと言いますが、お相手していただかなければならないという構造的な課題があります。

だから、過去のストックを当然次の学生たちに、次の年代に記録して伝えていく、事実として残していくことは当然や

るわけですが、それでもやはり毎年毎年全くの素人がやって来て毎年同じ質問をするかもしれない。そのところは大変お手数ですがご理解いただきたいですし、それ以外にまだまだ社会人として勉強しなければいけないことがたくさんあります。挨拶一つ、アポイントメントを取るなど社会人として最低限のルール・マナーを教えることからやっていかなければならないということですね。ひょっとしたらベースキャンプの中でドンチャン騒ぎをするかもしれない。その時にはちゃんとしっかり叱っていただかなければならないという、子供を相手にするような話ですが、やはりそういうところもあるわけです。

それから、学生の側も当然地域というものの存在をちゃんと理解しているのかと言いますと、かなり怪しいわけです。地域、地域と言っていますが、先ほども言ったようにどの広がりなのか、どういう主体の方がどんなことをやっておられるのか。

地域の方々の中にはまだまだ大学に無関心な方もおられて当たり前であります。そんなことをやっていることすら知らない、当たり前ですよ。ひょっとしたら反対されている方もいらっしゃるかもしれない。それが地域というものです。いろんな意見があっているような活動がある。これは大学側が理解する必要があると思います。

そして、先ほど「学生は毎年変わっていく」と言いましたが、当然必ず毎年の目的を大学側・地域側の双方がちゃんと共有する必要があります。今年はこれをやりましょうね、ここまで頑張りましょうねということですよ。

ただし、目標を作るということと成果を急ぐということは違うと思います。あまり成果主義に陥っては難しい気がします。

最後でございますが、「連携しつつ自立する」ということです。これに尽きるのではないかなと思ってまして、お互いに頼りきってしまうとどっかがいなくなってしまうと完全に消えてしまう。

最初に学生は触媒であると申し上げましたが、お互いに刺激を与えることによって学生も地域の側も新しい発見をする。万一、一旦それが休止した段階でも決してゼロにはなっていない、むしろそれを踏み台にして次のステップに進んでいるという状況を作りたいと思います。

今日はいろいろ抽象的なことを全体に申し上げてしまいましたけれども、あとのディスカッションでまた私の考えをどんどん批評・批判していただければありがたいと思っておりますということで、問題提起としての基調講演とさせていただきます。

どうもありがとうございました。

